

Title	壇太利滅亡史の考察
Sub Title	
Author	芦田, 均(Ashida, Hitoshi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1941
Jtitle	史学 Vol.19, No.4 (1941. 3) ,p.1(585)- 65(649)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19410300-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

奥地利滅亡史の考察

均 芦 田

目 次

- 一、奥地利の特異性
- 二、世界大戦後の奥地利
- 三、歐洲の勢力均衡と奥地利
- 四、ザイベルよりドルフスへ
- 五、ドルフスの獨裁制
- 六、ナチのクーデタ以後
- 七、國際情勢の急迫
- 八、奥地利の臨終

一、奧太利の特異性

物古びたる維納に來て、シユーベルトやストラウスの名曲に耳を洗ひ、リング街の高樓や王宮のたゞ
すまいに膽を奪はれる旅人は、ウイーンが歐洲文明の主要中心地の一であり、典雅なる藝術の都である
と考へがちである。確かに是は奧太利人の生活の一面を正しく捉へてゐる。併し乍ら奧太利歴史の基本
的な事實から云ふならば、奧太利は寧ろ逆に、歐洲文明の邊境地方に位する一の植民地的國家なのであ
る。奧太利の建國は、紀元第十世紀の頃匈牙利人に對抗する爲め獨逸西部からの移住者によつて創設さ
れた。當時の匈牙利人は異教徒であり、幾世紀もの間彼等にとつて怖るべき強暴なる敵であつた。中世
末期、匈牙利が漸次基督教化せられ、開化せられるに從つて、奧太利は一時平和を保つたが、紀元第十
六世紀、匈牙利が土耳其によつて征服されて以來、再び新なる形に於て昔ながらの脅威に曝されるに至
り、此の脅威は第十八世紀の末迄續いた。斯ように、匈牙利からの絶えざる壓迫は、西部獨逸を衰微せ
しめると共に、東部國境地方に避難した人々によつて、奧太利といふ政治的統一と勢力を得せしめる結
果になつた。丁度北方に於ては、スラヴ人との抗争が、プロシア國家なる政治的統一を生せしめたのと
同様である。

然じ乍ら伊太利や佛蘭西は兎も角として、プロシアにしる奥太利にしろ、一つの大きな文明の邊境地

方であるだけに、そこには西部獨逸に於ける程に、より一層高度の文明は決して擴まらなかつた。墺太利に於ける斯かる歴史的運命の最も重要な痕跡は、恐らくウイーンと他地方との對照と反目であらう。尤もザルツブルクとインスブルックを訪れる外國人は、墺太利の首都と田舎とが同じ氣持で密接に接觸した生活を營んでゐるかの如き印象を受けるかも知れない。併し此等の町は何れも長い間獨逸領であつた所で、寧ろ地方獨立の感情を有し、獨自の生活を營んでゐる。更にリンツ、グラーツ、或はクラーテンフルト等の典型的な地方都市に於ては、首都集中の傾向が他の國程に顯著ではない。墺太利の田舎町が眠れるが如く精氣を欠いてゐるのは、その活動力を首都に吸取られたからではなくして、幾世紀もの間、西洋文明の邊境地方として、昔ながらの狀態に留つてゐるからである。

獨逸の東部國境地方の自然的中心はボヘミアであつた。其處は、背後の山が自然の要塞をなし、南北接觸の要地であつたから、プラーグが、自ら地方の中心として、第十四世紀の間、獨逸の帝都となり、最も富裕な且文化の最も進んだ町となつた。併しながら、ボヘミアに於ける獨逸人の生活は、チエコ語を話すスラヴ民族の農奴を基礎としたものであつて、第十五世紀の初め、チエコ下層階級、農夫及び職工等は、下級貴族と共に、獨逸の領主並に商人に對して叛亂を起した。此の運動はジョン・フスの教へる宗教的異端とも結びついてゐたが、併し所謂フス教なるものは、實際上、一の宗教運動であるよりはむしろ國家的社會的なものであつた。チエコ人こそは、近代國家主義並に典型的な社會革命の先驅者で

あると謂ふことが出来る。

打ち續く内亂はボヘミアを荒廢せしめた。住民の大部分は依然として異教徒であり、ボヘミアは最早や歐洲の東部國境を守らんとする一帝國の中心ではあり得なかつた。當時、奥太利を除いては、ブランデンブルク國境地方も、後にプロシアとなつた地方も、未だ開化してゐなかつたので、獨逸東部の政治的中心は、自らプラーグよりウイーンに移つた。フス教徒の亂以前のボヘミアは富強な國土であつて、國王が大規模の政策を遂行する爲に充分な資材を有してゐた。又、既に長い間次第に衰へつゝあつたとは云へ、野心満々たる國王達の強い憧憬の的であつた所の、神聖ローマ帝國皇帝の王冠も、一三四七年より一四三七年に至る間は、主としてボヘミアの國王が保持してゐた。然るに一四三八年以降、皇帝の王冠は、ハプスブルク家（一二八二年以來奥太利を支配してゐた）に移つた。確かに第十五世紀後半、フレデリック三世の御代、奥太利は旭日昇天の勢で發展し、ウイーンは素晴らしい繁榮した。奥太利に於けるゴシック藝術の傑作、特にウイーンのセント・ステファン寺院の如きは、此の時期に出来たものである。それにも拘らず、此の邊鄙の國境地方、その瘦せたるアルプス渓谷は、國王に全歐を支配せんとする野心的な政策を實行する爲には充分の資材を與へず、此が爲、フレデリック三世の統治は悲慘な失敗に終つたのである。

ハプスブルク家では此の缺陷に對する救濟策として婚姻政策を用ひた。第十五世紀の間のハプスブル

ク家の婚姻政略は、匈牙利及びボヘミアの相續を目標としたが、當初は思はしくなかつた。然るに、フレデリック三世の子マクシミリアン一世と、バーガンディ公チャールスの娘マリアとの結婚は、思はぬ結果を齎らした。即ち一四七七年チャールス王の歿後、一人の嗣子もなかつたので、マクシミリアンがバーガンディ公國を繼ぐことになつた。當時バーガンディ公國は、歐羅巴の最も富強な且最も近代的な組織をもつた國家であつて、その版圖はバーガンディ公國の本土以外に、北フランスの大部分と、全ベルギー及びオランダを保有し、既にギルド組織の殻を脱した各種産業と比類なき軍事力の外に、有給の官吏による中央集権政治を行ふことによつて、所謂近代國家の形態を具へてゐた。

奥太利とバーガンディ公國との結合は、全く人爲的なものであつた。地理的な接觸も、言語上の類縁も、兩文明の間の關係も何もなかつた。約一世紀の後にはバーガンディ公國の多くがハプスブルク家に叛いて、ネザーランド獨立共和国を建て、更に一世紀の後、佛蘭西が其領域を征服し始めた。併し兎も角、バーガンディ公國との結合を達成した奥太利は、第十五世紀の末に至つて著しく國力を増した。と云ふことは、豊裕な富、強い軍隊、強力な中央集権政治、凡て是等はバーガンディが提供したものであつて、即ち奥太利は、バーガンディの資力及びバーガンディの人的資源を以て、第十五世紀當時に於ける近代國家の態様に近づいて行つたのである。

斯くして奥太利に於て、中央集権的權力が擡頭すると共に、地方貴族の權力が衰退し、ウイーンを除

いて他の地方都市の發展は、獨逸西部のそれに比べて、遅々として進まなかつた。此の二つの事實は、
澳太利の國家的發展にとつて、最も重要な意味をもつものである。都市の脆弱性は、インテリ階級の無
力、產業的發展の不充分、個人の權利及び自由の感覺の薄弱を意味する。又地方地主の弱いことは、ブ
ロシア精神における如き、峻嚴なる階級精神の缺如を意味する。プロシアに於ては、ウンケル貴族が農
民に對して冷酷な壓迫を加へてゐた時、澳太利の農民は、領主に對して地代を支拂つてはゐたが、事實
上、土地を自分の所有としてゐた。從つて澳太利に於ける都市と貴族の脆弱性は、社會組織の相對的な
安定と、激烈な社會爭議の缺如とを齎した。一五二五年の有名な獨逸農民一揆に參加したのは、澳太利
では、唯上部澳太利アッパーオーストリア一州だけであつた。併し乍ら此の上流階級の無力は、同時に、一國家としての澳太
利の無力を招來した。そして此の王朝をして近代國家の諸要素を外國から採り入れることを餘儀なくせ
しめた。茲に今までの澳太利問題の根幹があるのである。

豊富な富と強力な軍隊とを基として中央集権的官僚國家を建設せんとする企圖を抱いたのは、奧太利のハプスブルク家だけではなかつた。第十五世紀以來の英吉利のチニードル家、並に佛蘭西、更に短かい間ではあるがバーガンディ公國も、同じ政策を執つたものゝ一であつた。唯此等の諸國は、夫夫自國の資力を基礎にして立つてゐたのに對して、奧太利の場合は之をバーガンディから借りたといふ點に相違があつたのである。而もこのバーガンディとの關係は、ハプスブルク家の結婚政策に依つて出來たと

いふだけのものであつた。

やがて此の結婚政策は、マクシミリアンの子、フィリップと、スペインの嗣女ユアナとの結婚によつて、殆ど夢物語の如きものにまで進展した。當時スペインは、群小の諸領土から漸くにして統一國家としての形を整へ、世界征服政策に乗り出したばかりであつたが、一五〇九年、マクシミリアンの孫チャールス五世がスペイン王位を繼承した時には、其所領はスペインのみならず、南伊太利の全部、シシリイ、ロンバルディ（當時のミラン公國）、及中南米に於けるスペインの領土を繼承した。かくして今迄不毛なアルプス渓谷の一領主に過ぎなかつたハプスブルク王朝が、一躍して「日没する所なき」一大帝國となり、その版圖は兩大陸にまたがり、歐羅巴に於ては、墺太利のアルプス本國の外に、スペイン、オランダ、ベルギー、伊太利の大部分及び今日のフランスの北部並に東部を包擁するに至つた。

然るに茲に事態を一變せしめる一大事件が突發した。それは、一五二六年、モハッチの戦に於ける土耳其の匈牙利征服である。匈牙利と墺太利との間には、若し匈牙利王朝が滅びた場合には、匈牙利は墺太利に歸するといふ興味ある關係があつたが、今や、ボヘミアとそのモラヴィア、シレジアの諸州が、墺太利の領有となつた。匈牙利の大部分は土耳其に征服され、唯西部國境地方のみが、墺太利に歸した。併しその領有は墺太利にとつては有利な資産といふよりはむしろ荷重であつた。蓋し、匈牙利の貴族は、墺太利本國のそれと非常に異つて、依然として勢力があり、ハプスブルク家の匈牙利支配の企に對

して絶えず頑強な抵抗を企てたからである。彼等は屢々土耳其と協力したし、土耳其も亦之を利用することを忘れなかつた。モハッチの戦後三年にして、土耳其はウイーンを包囲したが、奥太利は歐洲諸侯の援助を得て辛うじて之を撃退することが出来た。

土耳其に對する防衛は奥太利本國のみならず、全歐の關心事であつた。同時に、ボヘミアを領有したことは、ハプスブルク家に大きな力を添へた。と云ふ理由はボヘミアに於ては、フス教徒の亂以來、チニコ語を話す異端的地方貴族の增長が募り、ハプスブルク家の中央集權的政策に强硬に反対してゐたから、チャールス五世は、その東部諸州、奥太利本國、ボヘミア及その諸州、匈牙利を皇弟フェルディナンド一世に譲ることを決意した。此の事は一九一八年に至る迄の近代奥太利の生誕とも看做すべき事實である。

これによつて奥太利は、膨大なハプスブルク帝國の版圖内にありながら、能くその國民性を保持することが出來た。併し、チャールス五世の歿後、ローマ皇帝の王冠は矢張り奥太利のハプスブルク家にあり、その世界政策と對土耳其防衛の要求は、益々外國の助力を必要とし、多くの外國人が此の國に流れ込んでは、舊壞太利貴族に代る社交界を形成した。其中にもスペインと伊太利の要素が特に著しく、ハプスブルク王朝を取り圍んで、スペインの例に倣つた絢爛たる宮廷生活が展開されるようになつた。宗教も、スペインから發し、スペイン的な性格をもつたジェスイット教が擴まり、言語も時々異様に響く

位にスペイン化されて來た。

斯くの如くして、奧太利は二つの文明をもつ國となつた。根源的には奥太利は獨逸の邊境地方である。併し此の邊境地方の上に、ハプスブルク宮廷を中心とした國際的文明が築かれた。それはスペイン的觀念を中心とし、カトリック教會によつて結ばれたところの、スペイン的、伊太利的、佛蘭西的、及び和蘭的な種々様々の要素を含んだラテン的、地中海的、カトリック的文明であつた。此の絢爛にして同時に淺薄な國際的貴族文明と、奥太利の地方都市農村に深く根ざした獨逸的要素とは、奥太利全史を通じて、絶えず相争つてゐる。前者はカトリック奥太利獨立運動に、後者は奥太利ナチ運動に現はれて最近の事件に主たる背景を務めたのである。

併し、奥太利には尙此の獨逸及地中海的文明の傾向に對して、黙々たる抵抗を續けてゐる今一つの傾向がある。それは邊境地方としての奥太利に自然的に生れたものであり、ボヘミア、ハンガリアの領有によつて強められたところのスラヴ的、バルカン的、或はトルコ的傾向である。一口で言へば、奥太利人の氣質は、常にスラヴ農民の簡素な生活に傾いてゐる。之を要するに地中海的、獨逸的及びスラヴ的な三つの文明の十字路であつて、地中海的な要素は主として上流階級、即ち貴族、軍隊、教會、官僚に、獨逸的要素は中流階級、即ち市民及農村の富裕なる分子に、東方からのスラヴ的忍從性は下層階級に屬するものと云ふことが出来る。これをナチス化する運動がどれ程に成功するかは將來の中歐の運命

を左右するものと觀るべきであらう。

二、世界戦後の奥太利

戦争は政治體制の受ける最大の試練であつて、國家は一般市民にその祖國の爲に死ぬ覺悟ありや否やを問ふ。若し國民の大多數が、行爲を以て、然りと答へるならば、一國の運命は尙未だ確かである。然し若しその答が否定的であるならば、それは最後の宣告である。世界大戦に於て、奥太利人の大多數は最早奥太利の爲に死ぬ覺悟を有つてゐなかつた。彼等はたゞハプスブルク帝國を憎惡しつゝ、彼等の意志に反して、祖國の爲に死ぬことを強いられたのであつた。奥太利に於ては、大戦の最初から市民の大多數に神聖な目的の爲の悲壯な犠牲の觀念を與へなかつた。彼等にとつてそれは單なる殘虐であり恐怖に過なかつたとも云へよう。

奥太利の士官にして愛國者たるヨゼフ・ロートは、大戦の約十年後出版した小説に死に瀕せるハプスブルク帝國を敍して云ふ。『奥太利に於ては、戦争は死刑執行から始つた』と。ハプスブルク帝國にとつて敵對者と認められる者は、裁判も審理もなく、手當り次第死刑に處せられ、就中最も多くの犠牲を拂つたのは市民であつた。希臘正教派教會の僧侶も、同宗たるロシア人及びセルビア人に同情をもつとの嫌疑を受けた。概括的に言へば、此の國の八分の五が敵國と言語系統を同じうするの故を以て、國事犯

の嫌疑を受け、裁判も宣告も受けずして死刑に處せられた。即ちロシアに同族を有するウクライナ人、セルビアに同族を有する南スラヴ人（特に所謂正統派教會に屬する人々）、ルーマニア人、南チロール及びトリエスト地方の伊太利人、更にチエコ人等が此の不幸な迫害の対象であつた。

斯くの如く世界大戦は奥地に於ては先づ市民に對する宣戰であつた。信賴し得る國民はたゞ獨逸人と匈牙利人及び波蘭人だけであつた。然るに波蘭人の忠誠は、一九一六年、プロシアがロシアに於ける波蘭領を併合せんとし、その地に傳統的な反波蘭政策を採用した時に終つた。獨逸人及び匈牙利人の忠誠は、最後迄完全には崩れなかつたが、併し事實上、是等の國民の間にも、苦惱の種は次第に熟しつゝあつた。結局、大戦の危機は、ハプスブルク帝國に對する憎惡の念を大多數の市民に吹き込んだ。併し、戦争に對する民衆の態度は、少く共最初の間は、上層階級の態度に隨從してゐた。多くの武官や戰時内閣の高級文官を送つたのは、此の上層階級であつたが、併し、奥地に於ては、獨逸、勃牙利、土耳其と異なり、彼等は身分を保障された特權階級であつた。勿論此の判断には二つの制限が必要である。第一にそれは、専門的武官には適用されない。奥地帝國に於ては、軍隊は常に一般民衆の趨勢から隔絶されてゐた。彼等は軍人としての名譽を堅持して忘れなかつたが、併し中流の上層階級の子弟にして軍隊に召集されたものは別であつた。彼等は民衆の感情にも觸れて居り、單純に戰を欲しなかつた。高位に

ある者程、率先して國家の爲に奉仕せねばならぬといふ觀念は、舊奧太利の大多數の支配階級から忘れられてゐた。茲に戦後ハプスブルク王朝並びに君主制に對する不人氣の主なる原因がある。彼等上層階級は、自らを安全に避護して、他を死地に追へるものである。下層階級の之に對する忠誠は、大戰に臨んで、完全に打ち碎かれた。併し第二に、かゝる結果は、匈牙利人及び波蘭人よりも、獨逸人の間に於て、遙かに不幸であつた。ガリシアや匈牙利に於ける上層階級は、大部分猶地方地主より成り、戦鬪意識をもつてゐたのに反して、獨逸人中の上層階級は、官僚、實業家及び其の他の事務家より成り、少しも戦鬪意識をもたなかつた。かゝる上層階級の威信の喪失は、ウイーンに於て特に甚だしかつた。スチリアやボヘミアの獨逸人の間には、それ程甚しくなく、チロール地方に於ては、依然として勢望を繋いで居た。大戰後の奧太利の政治的機構は、上層階級の態度が斯くの如く地域的に相違したことに深く影響されてゐる。即ち奥太利はかかる大試練に遭遇して失敗したのである。ハプスブルク帝國の崩壊は、單にチコ人や南スラヴ人の叛亂の結果ではなく、先づ第一に祖國の防衛者たるべき人々の、祖國に対する無關心の結果であつたと云ふべきである。

一九一八年十一月、皇帝カール一世が退位して社會民主黨が政權を握り、「ドイツ系オーストリア共和國」なる名稱の下に、民主共和制が宣言された。翌一九一九年、社會民主黨のザイツが大統領となり、カール・レンナーが首相に就任し、九月には聯合國側とサン・ジエルマン條約が締結されて「オースト

リア共和国」の領土的構造が決定された。國內少數民族はハプスブルク帝國と縁を切つて、波蘭人、南スラヴ人、ルーマニア人、イタリア人は夫々の國家に合體し、ハンガリアも奥地から袂を別つた。チエコスロヴァキアは獨立を宣し、ボヘミア及その諸州の獨逸人居居住地を統治することとなつた。奥地は、結局、ウイーン、ダニューヴ渓谷、アルプス諸州のみに還元された。

此の國が獨立國としての物質的要件を缺いてゐたことは、今更之を繰返す必要はない。孰れにせよ、新奥地が事實上獨立的生命を保持し得たのは、一九一九年より一九三八年迄の僅々二十年である。凡そ國家には、その獨立を維持する爲めに、絶對的に必要な最低限度といふものがある。併しかゝる絶對的限度よりもむしろもつと決定的なものは、その國の生活水準と隣國並に前時代の標準との關係である。換言すれば奥地の狀態が危殆に頻したのは、多くの失業者が飢ゑてゐたからではなく、かなり良い暮しをしてゐた國が、たゞ一擊にして、貧窮に陥つて了つたからである。

此の國の經濟的活動が衰頽した經緯を述べることは本篇の目的ではない。戰後奥地の國境は、戰前のハプスブルク帝國のそれと何等の關係もない。それまでハプスブルク帝國の諸州であつたものは、今は獨立國家である。従つて今まで國內通商であつたものが、今は對外輸出入となつてゐる。だから戰前と戰後の正確な比較は、不可能である。たゞ失業者問題と國庫の歲入のみが、この國衰頽の漠然たる示唆を與へる。

奥地利の農業は、戦後、農耕地の缺乏でひどく悩まされた。それはハプスブルク帝國の崩壊と共に、その東部農業地帯たる匈牙利が獨立したからである。穀類の約半分は輸入に仰がねばならなかつたから、アルプス山地の農業さへも重要欠くべからざるものとなるに至つた。此間にあつて外國觀光客の増加のみが奥地利農村の興隆に寄與することとなり、それが後年ナチ運動の主要なる資金の一つとなつた。

併し奥地利の工業は、農業に比べて一層怖るべき困窮に陥つた。戦前の國內市場及びバルカン市場が全く失はれた許りでなく、戰勝諸國は互に自國産業の保護の爲め、出來る丈け高い關稅障壁を設けた。是は何よりも工業的獨立といふ政治的必要性によるものであつた。大戰後の奥地利は工業國となつたのであるが、僅か六百五十萬の人口（その中の半分は工業地帯に屬してゐた）を以て國の獨立を支へなければならぬ際に、その市場を奪はれて大戰直後には失業者の數が十八萬に昇つた。尤も當時の通貨膨張は奥地利經濟的機構の内的缺陷に一つの緩和剤を與へたが、併し一九二二年には、此のインフレーションは工業の發達を刺激せずして、却つてそれを妨碍する程度に達した。國際聯盟を通じて國際借款が提起され、インフレーションは止んだが其後奥地利工業は復活してゐない。一九二七年——九年の好景氣も、單り奥地利には巡り來ず、失業者は依然として十萬を超えてゐた。それが世界恐慌の襲來と共に、百二十萬の工業人口の中失業者三十萬を超えるに至つた。而も此の數字は決して正確なものではなくて、實際は失業保險や仕事にあぶれた十萬以上の落伍者達を加へ、危機の絶頂に於ては五十萬を超えた。

たものと推定される。かかる状態の下に、人口死亡率に對する出産率の超過は四パーセントに低下し、而も澳太利は自殺率の最も高い國の一つとなつた。

ウイーンは工業の中心である以外に、曾て貿易及び金融の中心であつた。是等の職業も當然生産の趨勢に従ふ傾向を示し、次第にチエコスロヴァキアに移つて行つた。通貨膨張が終ると、これまで東南歐洲の金融の中心であつたウイーンの大銀行が、次々に破産した。一九二九年秋にはボーデン・クレヂット・アンシュタルトが、更に一九三一年五月には、澳太利最大の市中銀行たるクレヂット・アンシュタルトが破産した。其結果今まで密接に依存してゐた大銀行を失つて、工業はその活動の繼續が不可能となり、各地方に於いてセメントや鐵の工場までが殆ど賣り拂はれる始末であつた。

三、歐洲の勢力均衡と澳太利

一九一八年から一九三八年に至る澳太利の歴史は、パリ平和會議に提出された問題に對する決定的な解答を與へる。即ち澳太利は經濟的には獨立することが出來なかつた。併し經濟的狀態のみが決定的なではなく、國家の獨立の爲には、その市民の大多數が喜んで之に忠誠を誓ふ積極的な祖國愛が必要であるに拘らず、舊澳太利帝國は反対にその臣民の積極的な敵意を受けた。そして新共和國は異民族を切り離して後も國內市民の積極的な忠誠の念慮さへもつかみ得なかつた。防禦に難い國境を有し、軍隊も

小麥も石炭もなく、傳統的な支配階級も市場もなきこの小戰敗國の現状に、誰が満足し得られようか。そこで一方には舊ハプスブルク帝國復辟の要望があり、他方には獨逸との結合を求める者を生じたのである。

此の二つのコースの中、最初の「ダニューヴ聯合」の形に於ける舊ハプスブルク帝國の復辟は、多くの觀點から見て有望の如く思はれた。ダニューヴ委員會は、新しき政治形態に於ける舊ハプスブルク帝國たらんとした。それは舊秩序の繼續を意味したが、併しダニューヴ流域の舊經濟單位の再組織は、奧太利を初め此の地方の經濟事情に適合してゐたから、この案には伊太利以外の歐洲諸強國は決して反対しなかつた。大戰後間もなく、チエコスロヴァキア、ユーゴースラヴィア、ルーマニアは、佛蘭西の指導の下に、所謂「小協商國」を形成したが、この聯繫はパリでもロンドンでも歓迎せられた。伊太利は奥太利帝國の再現を怖れて反対の意嚮を示したが、併し之と交渉の用意は有つてゐた。

かかる好條件にも拘らず、ダニューヴ委員會案は、計畫だけで失敗に終つた。此の新しき形に依るハプスブルク帝國の再現に反対したのは、主として奥匈帝國の分裂によつて獨立した戰勝國であつた。それは換言すればハプスブルク帝國に對する諸民族の反対の繼續であつたとも言へる。然るに此と反対の解決即ち獨^{アンシユルス}奧合邦を理解する爲めには此の案の失敗した理由を概觀することが必要である。

舊奧匈帝國は、その種々の部分の協力を基本とする共和國ではなかつた。それは彼等の協力に基くと

同時に、種々の民族の階級性にも基因せるものであつた。如何なる國民も單なる協力に對して反抗しようとはしなかつたが、併し彼等が抑壓された場合にはその當面の階級に對して反抗した。例へば、匈牙利の貴族は、南スラヴ族、ルーマニア及びスロヴァキアの農民を多年抑壓して來たから、平和條約が匈牙利から是等の諸民族の多數を占める地域を奪つた後に於ても、匈牙利のダニューヴ委員會に對する第一の條件は、スロヴァキア、クロアティア、トランスシルヴァニアに於ける匈牙利大公達の財產沒收を承認せしめることであつた。チエコ人は、ウィーンに集中せられてゐる舊帝國の銀行及通商上のかなりの特權を彼等の國に移すことを希望した。然るにダニューヴ委員會が出來上ると、貿易も金融も再びウイーンにその自然的中心を据えることになる。それではチエコ人の新しく獲得した優越權を斷念せしめる事になるから、聽き入れる筈がなかつた。ハプスブルク帝國の東半は農業地帶であつて、生活の標準は非常に低かつた。處が今や、ルーマニア、ユーゴースラヴィア等々は夫々自國の産業を建設せんとしてゐた。彼等は引續いてその小麥を輸出するが、工業製品を大戰前のやうに輸入しようとは思はなかつた。併しかゝる一方的基礎に於ては如何なる經濟協力も出來るものではない。要するにハプスブルク帝國の崩壊は、此の帝國の支配民族を突落し、被抑壓民族を押上げたのであるから、大戰後間もなく組織せられたダニューヴ委員會は、次の二つの中の一つを意味するに過ぎなかつた。即ちそれは空虚な殻か、或は舊塊太利帝國を支持せる經濟的連環の眞の再組織か、何れかであつた。然るに後者は帝國內諸民族

の舊階級制の再構成を意味するのであるから大戦の結果から利益を得た是等の諸民族は、ダニユーヴ流域の經濟的聯繫を復活する爲に、その得たすべての利益を拠棄することを肯んじないのも當然の歸結であつた。

ダニユーヴ流域程、經濟的必要と國家的熱望の著しく背馳するところはない。ヴエルサイユ條約の解決は明らかに經濟的必然性に反してゐた。併しハプスブルク帝國の解體は、必ずしもヴエルサイユ條約によつて人爲的になされたものではなかつた。ハプスブルク帝國は、その軍隊がマケドニア及びヴェネチアの戦場で潰滅した時に、潰滅したのである。ダニユーヴ流域の統一は、疑もなく經濟的必然性である。然るに此の必然性は、此の統一の中心たらんとするウイーン及びブダペストの要求と一致しない。

此の地域の統一に向はんとする自然的趨勢は、今や統一の新しき中心を求めなければならない。然るにかかる統一を完成し得る力は、ダニユーヴ流域それ自身の中には何處にもなかつた。澳太利は最早かかる統一のイニシアティヴを取りうる立場でなく、ダニユーヴ委員會は、一片の空しき夢想以上の何物でもなかつた。それ故に大戦直後、結局、澳太利の凡ゆる眼は獨逸に向けられた。恰もウイルソン大統領が、民族自決の權利を世界に約し、澳太利にとつては、彼等の祖國獨逸帝國に復歸すべき時期到来せるかの如く思はれた。

ところが澳太利の各政黨は此の解決に對して夫々態度を異にしてゐた。小都會の非ユダヤ知識階級及

官僚のかなりの部分を代表してゐた獨逸國民黨は、明らかに獨**奧合邦**^{アンシユルス}を目的としてゐた。併し奥地に於ける獨逸國民黨は、大戰中ルードンドルフの過激な政策に與し、所謂「ジーグフリーデン」、即ち獨逸のすべての敵に對し復讐と破壊を齎すべき平和條約を要求怒號し、既にその望が失はれて後も、大戰の繼續を要求して鬪つたので、國民の信用を失つてゐた。有產階級と知識階級が常に無力である奥地に於ては、非ユダヤ有產階級の黨派、國民黨も、ユダヤ有產階級の黨派、自由黨と運命を共にして消え失せた。

殘れる二つの勢力は、カトリック黨と社會黨とであつた。この兩派の勢力は略互角であつたが、一九一九年、カトリック黨は農民の完全なる信賴を享けた。社會黨は全勞働階級を組織化し、之に次ぐ數年の間に、人口僅か六百五十萬の國で七十萬といふ驚くべき黨員を獲得した。そこで全有產階級は、ユダヤ人も所謂「アリアン人」も、ウイーン人も地方民も、カトリックも異端も、カトリック農民の大軍を背後に、悉く結束して、社會黨防衛の爲に團結した。

カトリック黨は、ハプスブルク帝國に絶對的忠誠を捧げる舊帝國內の唯一の黨派であつた。舊貴族及軍人は、舊奥地最大の特權階級であつたが、ハプスブルク家の沒落と共に、そのすべての特權を喪失し、多くは極度の困窮に陥つた。併し勞働者や農民は、チエコ人やユーロースラヴ人と共に舊體制に反抗し、ホーフブルクの王をば、彼等が新に獲得した國家的獨立に對する脅威と考へた。併し舊帝國に對

する愛惜の念は、昔日の社會的優位を惜しむカトリック僧侶や、或程度迄舊奧太利の社交的支配階級に屬してゐたウイーンの實業家や銀行家にもあつた。奧太利に於ける貴族、軍人、僧侶、銀行家、ウイーンの實業家——要するに奧太利「社交界」——は、最後まで獨奧^{アンシユルス}合邦に對する強力な反對者であつた。

然し農民の感情は之に呼吸を合せてはゐなかつた。奧太利の愛國主義はウイーンに於ては、殊にアルプス諸州に於て、地方主義の色彩を幾分かもつてゐた。ハプスブルク帝國復活の夢想は、アルプス農民に殆んど何等の關心をも持たせなかつた。カリンチアはその領土の削減を免れたが、スチリアは大部分を、ユーゴースラヴィアに割譲され、南チロールは伊太利の領土になつた。この深い屈辱の念から、獨逸と合體する希望が生じた。が他方に於て、奧太利農民は、母國語を忘れ、所謂プロシア風に威丈高に奴鳴る北獨逸の新教徒の官吏にコヅキ廻はれることを嫌厭した。一九一九年から一九三八年に至る迄、
奥太利農民は、此の二つの感情、即ち政治的經濟的支持を與へ得るような強力な國に對する魅惑と北方人に對する嫌惡との間に常に動搖してゐたが、農民はその心境を一再ならず變へた。一九二一年、チロールの無記名投票に於ては、投票者の九〇パーセントが獨奧合邦に賛成の投票をした。又チロールは一九三四年に、反獨「護國團」の強い支持者であつた。唯ウイーン、下奧太利、バーベンランドのみが之と異つてゐた。下奧太利は最後までカトリック黨の支持者であり、ウイーン及その近傍の産業地方は最後まで社會黨の支持者であつた。

かくの如く「社交界」は强硬に獨奧合邦に反対し、小都市の下層中流階級は概して之を支持し、農民は動搖してゐた。併し獨奧合邦の爲に活動した決定的な勢力は社會黨であつた。一九一六年に至る迄、奧太利に於ける獨逸社會黨は、獨逸カトリック黨と共に、匈牙利を除き、舊王國の唯一つの信賴し得る政黨であつた。若し社會黨がこの儘で行けば、大戰の終了する頃、最も烈しき打撃を蒙つたであらう。然るに社會黨は、時期を誤たず方向を轉換した。大戰を無制限に支持することは、彼等が以前宣傳した凡ゆる平和主義的理想を拠棄することを意味する。併しかゝる理解は彼等の指導者の間には見出されず、永い間大衆に接することも出來ず、傳統的な綱領に従つてゐなければならなかつた。遂に絶望して、フリツ・アドラー博士は、一九一六年十月、首相シュテュルク伯を暗殺した。驚いたことには、此れが労働者及び國民の大部分に非常な反響を惹起し、大戰休止といふ一般的感情が、こゝにその捌け口を見出したのであつた。一九一七年三月、ロシア革命が勃發し、多くの著名な社會主義者が、ロシア軍の俘虜から釋放されたが、その中に、オットー・バウエル博士があつた。彼は労働者の漠然たる左翼運動に理論的根據と、より廣い見解とを與へた。一九一八年一月、彼がヴィーンに歸ると、労働者達は大戰反対の大ストライキを直ちに中止した。バウエルは極めて明瞭に自己の所信を述べて、奥太利の最後は不可避であるから、社會黨は崩壊せんとするハプスブルク王朝と運命を共にしてはならないし、又社會黨は諸民族の獨立國を形成せんとする企圖に反対してはならないと云つた。結局社會黨は、大戰が済んでも、

それによりて威信を喪失するどころか、誰も皆大戦を呪詛するに至つた以上、彼等は平和主義の成果を獲得することが出來た。

一九一八年、社會黨は完全にハプスブルクと絶縁してゐた。そして彼等は斷乎として獨奧合邦のスローガンを掲げた。勞働階級の運動にとつては、近代的產業國に屬するといふことは、死活問題であつた。

その上社會黨は、自由黨の急速な衰頽によつて、多くの自由主義的、或は「ブルジョワ」民主主義的要素を繼承してゐた。大獨逸の理想は、一八四八年以來の奧太利民主主義の底流であつた。今や社會黨は此の古き旗幟をば再び生きくと翻へした。社會黨の壓力の下に、一九一八年十一月十二日、奧太利州議會は、共和國の宣言と共に、獨奧合邦を滿場一致を以て決議した。

若し一九一八年に、一九三八年の如く電光石火の早業を以て獨奧合邦が成就せられたならば、何等の抵抗もなかつたであらう。尤もその事實が、聯合國の間に不満を増したかも知れないが、併し之は想像である。確かなことは、當時獨逸は獨奧合邦を複雑な感情を以て眺めたことである。プロシアの舊支配階級は、獨逸國內に南方のカトリック的民主主義的要素の増大するを喜ばなかつた。獨逸人が、獨奧合邦によつて平和條約に負擔が重ることを怖れたのも無理のない所である。兎も角、奧太利州議會の決議は一片の死文となり、その實現の一歩も踏出されない中に、平和條約は、獨奧合邦の形式的禁止を規定して了つた。

此の規定は、平和條約の他の多くの殘忍な規定と同じく、クレマンソーの力によるものである。サン・ジエルマン條約第八八條（獨塊合邦の禁止）の目的は、明らかに達せられてゐない。獨塊合邦は事實となつた。唯之を實現する方法のみが、此の條項に左右されただけである。若し之がなかつたならば、獨塊合邦は民族自決の原則の輝かしき勝利であつたであらう。そしてこの權利行使する機會を獨逸少數民族に與へることによりて、民主主義、民族自決、國際紛争の平和的解決の原則は、一層重きを爲したであらう。塊太利に於ては、民主主義、民族自決、法の支配の爲に起てる政黨が、益々力を得て、塊太利に於けるナチ運動の最も有力な支柱は、事前に取除かれたであらう。又塊太利の社會主義運動は、獨逸社會民主黨のプロシア主義と、獨逸共產黨の無責任なる亂暴に對して、適度の裁決力となつたであらう。

クレマンソーの對獨政策は、獨逸に如何なる政體が出來ようとも、獨逸は所詮佛蘭西の敵である、それ故に獨逸は出來る丈弱くして置かねばならぬといふ確信に基くものであつた。併しクレマンソーが實際に採用した政策は、彼のかゝる見解と一致しないものであつた。フランスは人口四千萬足らずの國であり、之に對し獨逸は六千萬以上であつた。増加率も佛蘭西より獨逸の方がかなり高かつた。この半世紀以内に、獨逸は、平和條約の凡ゆるハンディキャップにも拘らず、工業的に佛蘭西よりも優勢になつた。要するに獨逸は佛蘭西よりも強いといふことが出来る。此の事をクレマンソーはよく覺つてゐた。

併し彼は、獨逸との和解を求めず、さりとて獨逸を粉碎しようともせず、獨逸の潛勢力の根本に觸れることなしに、飽迄も抑壓しようとした。然し間もなく獨逸はその屈辱に對して復讐し始めたのである。

クレマンソーは平和條約が歐洲情勢の永久的な不均衡を意味するものであることをよく知つてゐた。にも拘らず歐洲大陸に於ける佛蘭西の優位を維持する爲の唯一の保障條件として、政治的にも經濟的にも獨力を以ては、到底その獨立を維持し得ない國を創るにあつた。併し、獨逸と伊太利が大戰によつて突落された困窮の状態から新しい力を以て起上るや否や、歐洲の均衡は忽ちにして崩れた。東南歐洲の現狀は、干渉や政治的壓迫によつて漸く維持され得るやうになつた。平和條約の不自然なる解決を作つた者は、當然自らの力を以て此の解決を維持しなければならぬ。然るに合衆國は既に歐洲の舞臺から引き退き、英吉利は常にヴェルサイユ條約の解決を喜ばず、從つて之を擁護する義務を感じなかつた。そして佛蘭西は、その人爲的創造の結果を單獨で維持するには餘りにも弱かつたのである。

四、ザイペルよりドルフスへ

戰後に出來上つた奧太利共和國の歴史は、極めて些々たる社會問題に關する實に多くの烈しき鬪争に充されてゐる。それは戰後奧太利の國際的勢力の缺如、大なる政治的理想、根本政策に對する指導力の缺如等から、一片のパンの爲に鬪争を餘儀なくせしめるこの國の貧窮の當然の結果であつた。かゝる些

細な闘争に於いて、此の國は相反する二つの陣容——カトリック黨と社會黨——に分れてゐた。大戰後の最初の二年、未だ飢饉狀態が續いてゐた時、労働者は屢々法律を振り廻して、強壓的に徵發令を發布した。その時から農民は彼等がこの國を奪ひ去らうとしてゐるのだと眞面目に信じて、労働者との間に深い溝を生じ、地方農民の防衛團體である最初の「護國團」が組織された。カトリック僧侶が農民の信賴を繋ぎ得たのは、全く社會黨のお蔭であつた。

社會黨は、大戰の最後の年に於ける平和主義の宣傳、大戰後の獨アンシ 売太利合邦の主張、及び戰後壞太利の悲慘な經濟狀態を救ふには、凡ゆる現狀の徹底的な建直しのみが將來への希望を繋ぎ得たが故に、かなりの威信を獲得してゐた。現在の機構に依つては獨立を維持し得ない國に於て、急進主義ラディカルズムが起るのは驚くに當らぬことであつた。舊上層階級は、壞太利に於ける「赤色專制」を非難するのであるが、多少の行過ぎは認めるとしてもかゝる專制があつたとは斷言し得られない。

戰後壞太利に於ける社會黨の政策は、戰前に引續き、労働階級には全體主義的な、その他には民主主義的であり、實際政策は穩健にして妥協的なものであつた。社會黨は労働者を代表する唯一の機關であり、從つて社會黨員に非ざる労働者は殆どあり得なかつた。併し同時に社會黨は、戰後最初の年に於ける共產黨の叛亂に際しては、武器を執つて、之が鎮壓に協力した。

壞太利共和國成立の日以來、社會黨はカトリック黨との聯合内閣に協力した。然し隣邦匈牙利のソヴ

イエト共和黨没落後、カトリック黨の勢力が優勢となるに及び、社會黨は、オットー・バウエルの指導の下に、一九二〇年以來、此の「ブルジョワ」内閣への參加を拒絕した。而もそれによつて社會黨は選舉の度毎に素晴らしい成功を収めた。中央政府を去つても、社會黨は、議會に於ける反對黨であるに拘らず、政治に對する勢力を喪失した譯ではなかつた。國家の實權の多くは州政府や自治都市に在つた。 埃太利共和國の全歴史を通じて、社會黨は九つの州政府の中六つの州政府に參加し、ウイーンの州政府は完全に彼等によつて支配された。のみならず彼等は埃太利の全人口の四七%を支配した。長い間彼等は軍隊や警察に對し可なりの勢力をもつてゐたのみならず、中央政府に對する勢力も侮り難きものであつた。如何なる政府が成立しても、社會黨の同意なしには重要な政策の決定をなし得ない程強力であつた。

故に社會黨は不滿ある毎に政府に對して政治的ストライキを行つて威嚇する立場にあつた。オットー・バウエルは之を「反對の立場にある政府黨」と言つた。社會黨は、反對黨が實力を以て之を粉碎せんとする危険を慮つて、デモクラシーと社會黨の擁護の爲、「民主防衛同盟」といふ武裝團體を結成した。

かくして社會黨は貧窮と失業の時代に相應らず全投票の四〇%以上を獲得し、バウエルは、完全に民主的手段によつて、多數を獲得する日の來らんことを指摘した。併しかゝる期待以外に、黨員の信賴を保持するための手段が他にもあつた。それは都市の統治であつた。

埃太利社會主義の最も強い魅力はその都市政策にあつた。殊に彼等が常に投票の三分の二以上を獲得

したウィーンは、最も重要な都市であつた。特に一九二〇年、彼等が政府を去つた際、ウィーンはカーリ・ザイツ市長の下に、社会黨の行政的活動の本據であつたが、その市政は、たゞ支配的勢力がカトリック黨から社会黨に移つたといふ相違だけで、全くリューゲル市長の傳統を引いたものであつた。舊君主國の下に於ける都市の權力は微弱であつたが、奥地共和國となつてからはそれが著るしく擴大され、ウィーンは單に下奥地州の首都から奥地共和國の下に於ける自由市となり、市稅の外に州稅をも徵收し得るやうになつた。あらゆる種類の贅澤品及び家屋所有者に對する「ブライトネル」の課稅政策は、ウィーンを財政的に獨立且強力ならしめたが、それは社会黨に對する富者の憎惡を高め、反社会黨をして次第にファシズムの線に沿はしめるに至つた。

ウィーンに於ける私有家屋の家賃は、馬鹿々々しい程高かつた。家屋を買ふことは、下流中層階級の小所得者にとつては恰好の投資であつた。リューゲルはかかる下流中層階級に信賴してゐたのであるが、今やウィーンの社会黨は實際上彼等の財産を沒收した。即ち市有家屋建造の政策を樹てたのである。それは世界中の保守的改革者の稱讚を博したものであり、同時にウィーンの反社会黨派からは、正に「潛行ボルシエヴィズム」の最も良き實證と見られたものである。デモクラシーの没落後、ウィーンの市政を支配せるカトリック黨は直ちにこの建造案を中止したが、奥地に於けるナチスは我物顔に再びこの建造案を採用した。

社会黨は、かくの如く低廉にして健康な家屋建造等、あらゆる種類の特權の平等分配をなさんとする都市政策によつて、その地位を殆ど確乎不動のものとした。この勢力の進出は一面に於てはその行政的手腕にも歸せられるが、他方に於ては反対派の無力にも歸せられた。反対派の無力は、大戰前に於けるが如く、奧太利社會黨の最も有利な點であり、又ナチスの進出に至る迄も然うであつた。奧太利の社會主義運動にかうした一種のラディカリズムを與へたのは、かゝる特殊の事情に依るのである。然るに社會黨の壓迫の下に於けるかゝる民主主義的政略は、實際勢力の變化を反映するものではなかつた。工業は衰退しつゝあり、労働者は幾千萬となく失業し、軍隊と警察は再び次第にブルジョワ化しつゝあつた。その當然の結果として、社會黨は勢力を失ひ、カトリック黨は之に代らんとしてゐたのである。

奥太利共和國はイグナス・ザイペルの名と切つても切れない因縁に立つてゐる。敗殘の國を提げて、獨立再建に努力したものは實にこの敬虔な牧師ザイペルであつた。カトリック黨の首領として政權を握つたけれども、通常の意味に於ける黨首とは全く趣を異にしたものであつた。彼は經綸抱負と共に、強い政治的な熱情をもつてゐたから、國際聯盟の政治家を感激させて、その援助により外債を募つて一九二二年に通貨整理を斷行することが出來たのである。

牧師としての彼は政治運動も宗教活動の方向に沿ふべきものと信じてゐた。教會の利益は現存の社會秩序と密接に結合するとの信念の下に『カトリック教會は資本主義の形態の下にのみ生存する』と考へ

てゐた。この信念は社會主義の夢想を斥け、廣汎に亘る社會改革に反対し、從つて社會主義的組合を排斥した。

實際運動として彼を支持したものはウイーンの銀行家であり、工業家であつたけれども、其衷心の動機に於てはザイペルと財閥との間に全く相異なるものがあつた。財閥は専ら社會立法の改革に執着したに拘らず、ザイペルは此等の物質的利害を以て第二義的のものとしか考へてゐなかつた。彼は奥地の復興が精神的再生に在ると信じ、教會の力を強化して、云はゞ中世の宗教國家を再現する如き夢想を抱いたのである。

然し戰後に於けるウイーン市の勞働階級は本來の意味に於て既に舊教信者ではなかつた。だからザイペルの勢力に對抗して逸早く教會反對の運動を起したが、この二つの反對勢力は奥地滅亡の最後の瞬間まで殘つてゐた。勿論ザイペルの社會黨反對運動は彼の死後にも繼續せられ、一半の目的を達成したけれども、之が爲めに教會の勢力が復興した譯ではなく、後に述べるが如く却つてカトリック黨の支持者を失ふ形となつた。

ザイペルは奥地政界に於ける例外的な型である。社會黨首領オットー・バウエルと其政策の大綱を同じくし、大局の見透しについて多くの異見は有たなかつた。然しバウエルはボヘミアのドイツ種であり、ザイペルはウイーン人である。だからカトリック黨員に鬪志を燃え立たせ、其敵を憎む感情を植

付ることに成功したけれども、ザイペルの股肱の參謀としては、田舎のキリスト教社會黨員の中から有力な分子を糾合することが出来なかつた。従つて、終始ザイペルの周囲に在つたものはヴィーンのブルジョアたるジーグハルトの一昧であつて、社會主義を憎惡する共通の感情に燃えてゐた。だが、この點は奧太利のカトリック黨に頗る不利益を招く結果となり、終には財閥と運命を終始する始末となつたのみならず、ザイペルが豫定の如く奥太利の社會黨と民主々義とを打破した暁に、この大勢に乗じて擡頭したファシズムの爲めに却つてカトリック黨が擊破せられる結果となつて了つた。

奥太利共和國の最初の十年間は案外に國內の平和を維持することが出来た。それは黨派的分裂と憎惡の念が解消したといふのではなかつたが、大戰と革命とのまざりとした記憶から何人も一九一八年の憲法を顛覆しようと企圖し得なかつた爲めである。

ところが一九二九年の初頭に地方の一都市シャツテンドルフで社會黨員が暗殺された事件が起り、それが遂に社會黨討伐の慘劇にまで發展した。事の起りは、他の多くの政治的暗殺と同じやうに、陪審員が無罪を主張した爲めにヴィーンの法庭が被告を釋放した事に始つた。憤激したヴィーンの社會黨員||多くの労働者||は七月十五日に街頭デモを行ひ警察員と衝突した揚句、群衆は猛り狂つて大審院を焼討ちしようとした。社會黨首領は群衆鎮定の爲めに共和國防衛團を繰出したが、時遇々現場に馳せつけた軍隊が、群衆に向つて發砲したことから、混亂は遂に頂上に達して、二日間に亘る市街戦が展開され、

死者九十名、負傷者一千名を出す騒となつた。

この事件はオーストリアの政治的均衡を破る端緒を開いた。ザイペルは峻烈な手段に出ると聲明して、社会黨員を軍隊及警察から驅逐したが、地方では、ヴィーンに於ける『ボリシエビキ暴動』と稱する報道が傳へられ反社会主義運動に點火した。一九二〇年以來各地にばつゝ行はれてゐたハイムウェーレンの運動が忽ちにして政治舞臺の上に登場して、社会黨の總同盟罷工に對抗して、ハイムウェーレンが實力を行使し、總同盟罷工の失敗に乗じてファシスト運動は急速に勢力を占めることになつた。

ハイムウェーレン運動

ハイムウェーレンは主として農民の組織體であつて、之を指導する者は村の上層階級、地方貴族、辯護士、學校教員等であつたが、『赤』を擊滅する以外には特に、つゝ、きりした目標を掲げてはゐなかつた。殊に奥地の右翼運動を理解するに忘れてならないことは、この赤色反対の運動さへも左程眞面目には考へられてゐなかつたといふ事實である。

元來奥地の農民は労働階級を疑つてはゐたけれども、私有財産を敵としての相手とは考へなかつた。だからボリシエビキの暴動と聞いて漠然と蹶起したものゝ、間もなく其熱情は冷却したのである。これがハイムウェーレルの熱心な運動にも拘らず、遂に農民大衆を獲得しえなかつた理由である。

ザイペルは直ちにハイムウェーレルを利用して、其の指導精神を與へ、赤化分子に對抗させたのみなら

す、民主々義運動の壓迫に須ゐた。「議會を驅逐せよ」、「強力政府を樹てよ」とのスローガンがそれである。その結果は、ザイペルの率ゐるカトリック黨自身を破壊することに落着くのであるが、效果の顯れるまでには相當の年月を必要とした。ハイム・ウェーレルを組成する農民は社會黨と相容れない爭點をもつ譯でもなく、況んや議會だのカトリック黨との間に紛糾を生じた次第でもなかつた。だから二ヶ年後に總選舉に臨んだ際にはカトリック黨が六十六、ハイム・ウェーレンは僅かに六の議席を占める程度の勢力しか示し得なかつたのである。

ドイツ、イタリーに於てはカトリック教の農民が社會黨の労働者を憎悪したに拘らず、墮太利では事情が全く異つてゐた爲めに、墮太利のファシストは力を得ることが出來なかつた。そして都市の下級中產階級が極めて微力であつたことも獨伊と異なる點であり、又次第に興隆しつゝあつた獨伊の產業が、ファシストの支持者であつたのに反して、墮太利に於ては銀行家も産業家も凡て凋落の一途を辿つてゐたから、ハイム・ウェーレンは有力な支持者を欠いてゐた。他日墮太利のナチスが擡頭した際に於てさへ、ドイツの如き中產階級の強力な運動と比べて、農民の態度は頗る微温的なものに過ぎなかつた。だから、ハイム・ウェーレンの活動分子は却つて戰前のドイツ國民黨の殘存者、換言すれば地方のインテリ階級、辯護士、教師、醫師、薬剤師等の年若き一群、又下級中產階級の中では商店主、小工業家等も民主々義反対、ファシスト陣營に投ずることとなつた。其外に舊帝政時代の權力階級、貴族や士官は民主主義反

對の立場からファシストに同情した。尤も此等の舊體制に憚れる連中は必ずしもファシスト制を好みといふのではなく、概して民衆運動を嫌惡するのであるが、王制復古、軍治獨裁の樹立を要望した點に於てファシストと共通の點を持ち、後に現れたフェイ少佐の如きは其代表的典型であつた。

地方に於てハイムウェーレンの指導者に適する農民を見つけることは殆んど不可能であつたから、偶々出色の人物としては田舎貴族か軍人かの外に、求め得られなかつた。従つて運動の首腦者として逸早くフェイ少佐やスターレンベルク公爵が頭角を現はした譯であるが、農民達は貴族と軍人とを好まなかつた。そこでハイムウェーレンと農民との繋がりは益々稀薄なものとなつた。尤も前記の指導者等も俊敏な人材で無かつた許りでなく、彼等の胸に描いてゐる夢想は近代的な凡ての勢力を一掃することであつて、實際的な經綸は全く持合せがなかつた。

スターレンベルク公は一九二〇年以來ドイツの志願兵となつてシレジアで波蘭と戦ひ、一九二三年にはミュンヘンに於てナチスのクーデタに參加した經歷をもつてゐる。それがハイムウェーレンの黨首となつて後は、ナチス反対、反獨派の統領と仰がれることになつた。世界も彼自身も、彼がナチスであるのか、ファシストか、王朝派か、乃至は獨奧合邦派であるか鑑定がつかない状態にあつた。恐らく彼自身は、同時に凡てを兼ねたものと考へてゐたのであらう。

之をヒットラーの立場と比較して考へてみると、ドイツ・ナチスは他の凡ての黨派を打倒し、他の團

體を無視してヒットラー自らの黨のみを擴充したのであるが、墮太利のハイムウェーレンは絶えず各方面の政治家と交渉して合同を策し、苟合を謀り、時には同じ黨派の領袖を排斥してナチスとの握手を企てるものさへあつた。この批評は必ずしも固有のハイムウェーレン領袖に當て嵌るのみならず、ザイペルやドルフスの如き政治家の場合にも亦その通りであつた。凡て此等の一群は、時にムッソリーニと通謀し、時に社會黨とも妥協を試みた。かくてハイムウェーレン運動が、失敗以外に何物をも齎さなかつたことは理由無きことではない。

それは兎に角一九二七年以降、ハイムウェーレンは社會黨と民主々義との攻撃に全力をあげた。翌二十八年には全國の黨員を動員して、武器を帶びた示威運動を行つた。一九二九年春には遂にザイペルを強壓して首相を辭任させ、その後任をも引込ませる程の勢力を揮つた。

五、ドルフスの獨裁制

ザイペル宰相の後を享けて政局に立つたシェーベルも決して幸運には見舞はれなかつた。國內の憲法問題は何とか片附いたけれども、外交と經濟との兩面からする重壓はそれ以上に急迫した場面を展開した。

先づ表面に現れたものは獨塊の關稅同盟案に對するフランスの反対である。この案は平和條約に規定

する獨塊兩國の義務に背反するものとし、その根據として一九一八年十一月十二日の決定を援用するのである。フランスのかゝる態度はドイツと塊太利とに於て民主主義の殘壘を維持せんとする政治家に致命傷を與へたことが、後に至つて次第に明白となつた。

その間にハイムウェーレンの陰謀に依つてシェーベル内閣は閣内の意見對立の結果退却を餘儀なくせられ、副總理であつたカール・ヴァウゴインが宰相の地位にせり上つた。然し新内閣も亦社會黨とシェーベル派とに挾撃せられて議會の多數を占めることができなかつた。政府が議會を解散した機會にハイムウェーレンは獨裁政治の樹立を要求し、新政府に二名の閣員＝スターレンベルクとヒューバー＝とを送り、ザイペルを外相に据えて聯立内閣の形をとつた。然し社會黨の態度は依然强硬であり、總選舉は政府の敗北に歸した爲めに、英佛兩國の政府も、塊太利が一日も速かに立憲的政府を確立することを希望する旨を通告して來た。かくなつては聯立内閣も退陣の外なきを悟つて、ヴァウゴインはカトリック黨に後事を託して退いた。

走馬燈の如き塊太利内政の紛糾を通じて、後に殘つた結果は争鬭そのものよりも更に危險なものであつた。それに民主主義者と、反民主主義者との三ヶ年の争鬭によつて塊太利の政治組織が全く廢墟となつたことである。この争鬭の以前に於ては、カトリック黨が最も絶大な黨派であつて、これと傾向を同じくする國民主義者と小會派の支持を得れば、いつも議會に絶對多數を占めることができた。社會黨は

有力な反対黨として終始し、融通の利かない乍らに、出所進退は明かに計算に入れうるものであつた。ところが三ヶ年の戦ひの後に政界は全く混亂に陥つて了つた。

社会黨は案外に黨員を減じなかつた。尤もスチリア地方の礦業區に於ては次第にドイツ・ナチスの勢力が浸潤したけれども、これとても意外に社会黨と歩調を合せて、共同して政府に反抗する状態であつた。そこで反動的政治家は窮屈に於て次第に立場を失ひ、却つてナチスに脚を掬はれることになつた。

カトリック黨は其幹部の多數がハイムウェーレンと深い關係を結んだ爲めに、大なり小なり民主々義反対の陣營に偏する結果となつた。加之ザイペルがハイムウェーレンと妥協した爲めにシェーベルの率ゐる立憲派を見放すことになり、奥地のデモクラシーは運用の出來ないものになつて了つた。換言すれば此國のデモクラシーは社会黨の敗北に依つてに非ずして、反社会黨分子の分裂に依つて斯る状態を招いたのである。

ザイペルは奥地最大の銀行クレヂット・アン・シユタルトの支拂停止に直面して、社会黨との聯合内閣を目指んだけれども、社会黨は之を拒否した。ザイペルは舉國一致内閣によつて奥地の危急を救ふ方法を考慮したのである。

アメリカに起つた經濟恐慌が、歐洲に波及して、先以て奥地を脅かしたのであるから此急場を切抜けるには、賃銀の切下、俸給の減額、失業手當の削除等は止むを得ない措置と考へられた。之が實行に

は社會黨をして其責任を分擔させることが何よりも必要である。然るに社會黨は、その責任をさけて、自由に政府を批判する立場を擇んだのであるから政府は所詮議會の多數を味方とすることが不可能であった。その時まで社會黨は巧みに妥協を策しつゝ、自己の主張を維持することを忘れなかつたのであるが、こゝ迄押し詰められては、自ら犠牲となるか、左もなくばデモクラシーの顛落を見衛る外に往く途はなかつた。然し社會黨が犠牲を忍んで責任を取る場合には、黨員たる勞働階級は、幹部を以て叛逆者と見做し、ファシストの乗ずるところとなることは明白であつた。反之、萬一社會黨が黨員の鬪志を搔き立て得ないとすれば如何にして其力を維持することが出来るであらうか。それは云ふ迄もなく致命的なデレンマであつた。そして澳太利のデモクラシーは終にその底をついたのである。

デモクラシーの埋葬式以前に尙ほ爲すべき行事が殘されてゐた。ヴァウゴイン内閣の倒壊後間もなくハイムウェーレンは崩壊の運命を辿つた。一九三〇年の總選舉に於てドイツ・ナチスは著しく勢力を擴大したに拘らず、澳太利のナチスは一の議席さへも占め得なかつた。そこでナチスはハイムウェーレンの死屍の上にその力を築かうと試みた。

ドイツからの要求は三ヶ條から成つてゐた。

一、獨塊合邦、王政復古反對

二、議會政治反對

三、ヒットラーの指導に聽從すること

この要求を受けてスターレンベルクはフェイ少佐と共に王黨に趨り、少數派はスチリアのハイムウェーレレンと共にナチスに合流した。

一九三二年四月廿四日の地方選舉はナチスの擡頭を告げる曉鐘であつた。社會黨は依然その勢力を維持し得たけれどもカトリック黨の受けた打撃は甚大であつて、ウィーン市に於ては卅四個の議席から十五個に顛落した。ザルツブルクと下奥地太利に於ても過半數から三分の一の勢力に成下つた。

かくしてカトリック黨の落潮は疑ふ可らざる趨勢となり、民主的社會黨とファシストとの最後の決戦は次第に近づきつゝあつた。その際に登場した政治家がエンゲルベルト・ドルフスであつた。

ドルフスは農村に生れた不遇の私生兒であつたが、不具に生れついた爲めには具さに辛酸を嘗めた。

幼少にして僧院に入り、教會に身を捧げる方針であつたが、十九歳の時にウィーン大學に入學して以來、僧職に就くことの不適當であることを發見して方向を變へた。このことは當時の社會情勢から云つても勇氣を必要とすることであつた。何となれば農夫の家に生れて不具の身に育ち、教會の給費生として大學に入ったものが、中途に方針を變へて給費生たる資格を失ふことは、近隣に對しての面目問題である許りでなく、自活の途をも顧慮しなければならないからである。

間もなく世界大戰が勃發して世相は一變したが、ドルフスは大學に於て經濟を專攻し學位を獲る爲め

に懸命の努力をつづけた。その後伯林に行つて、其處で結婚した。

ドルフスはやがてカトリック學生團體の役員に選ばれ、次で南墺太利農業會議所の書記に任命された。この地位は彼が終生を通じて努力を捧げた仕事であつて、孜々として農家の利益を擁護することに専念した。

ドルフスは當初カトリック黨の民主々義派であつたけれども、後には次第に右傾して、暫時にもせよ獨裁者となつた。尤も墺太利政治家は主義に囚はれるよりも多分に實際的であつたから、彼が獨裁的政冶家となつたことも政治的運命が然らしめたところである。ドルフスは、典型的な墺太利人であり、親切心の深い、然し怒りっぽい性格の持主であつた。彼が宰相の地位に即いたのはザイペルの死後であつて、云はば其相續人として政界に登場したものである。

ドルフスが就任して以後、カトリック黨と社會黨との關係は一層氣まずいものとなり、從つてバウエルとの交情も冷やかになつた。ところが一九三三年一月にヒットラーが伯林の政權を握つてからは、墺太利も愈々其運命を決すべき瀬戸際に立つたのである。

ドルフスは次々に内政上の難關にぶつつかつた。國庫の窮乏は年々に度を増したし、政黨各派の態度も安定を欠く情態であつた。その時に勃發したのが、ヒルテンベルク武器事件と稱する厄介な問題で、之に關連して鐵道從業員のストライキが起り、伊太利並に匈牙利との國交が悪化する許りであつた。議

會は鐵道罷工の問題に依つて内閣を少數に陥れたが、投票手續の誤から、議長、副議長相ついで辭職した。そうなると議會を召集する權限あるものがないので、三月四日の事件以後は議會が存續するのでもなく、解散せられたのでもなく、忽然として姿を隠したまゝになつた爲め、かくては政府が獨裁的行動する外ないとの解釋に落ついたのである。

だがドルフス獨裁制の背後の力は決して憲法解釋の技術問題ではなくて、實は伯林に於けるナチスの勝利であつた。元來ドルフスの議會内の勢力は約三分の一に過ぎないのであるから、西歐諸國ならば、政府は一たまりもなく崩壊すべきであつたが、墮太利流の「引延ばし」「妥協苟合」の傳統に依つて政府は餘喘を保つことが出來た。然しどイツ・ナチスの勝利を占めたこの際、議會で過半數を占めるか、左もくろんばナチスの意嚮に反して政府に立つことは不可能であつた。

一九一九年以降、墮太利の政界はカトリック黨と社會黨との對立によつて政界が縱斷されてゐたのであるが、新たにナチスの擡頭によつて三派鼎立の形となつた。だからドルフスの執るべき途は二つの内の一つである、即ち社會黨との聯立に依つて民主主義を守るか、ナチスとの提携によつて獨裁制に趨るかであつた。然るに双方ともに重大な困難が伏在する。といふ譯は一年近く前にカトリック黨と社會黨との連繫が問題となつた際、社會黨の拒否に依つて交渉が斷絶したからである。

然し他方ナチスとカトリック黨との提携は問題にならなかつた。何となれば、獨裁制は互に排他的で

ある。従つて獨裁的傾向の各派が集つて協力することは當初から見込のない問題であるが、夫れにも拘らずドルフスは之を試みようとした。

ドルフスが社會黨と聯繫すれば、ドイツ及伊太利の壓迫を覺悟しなければならぬ。此場合には、チエコスロヴァキアは極力支持を與へるであらうけれども、英佛の決心がつかない限り、プラーブの支持は云ふに足りないものである。かような外交上の考慮と同時に、一方には年來の社會黨嫌ひの感情も手傳つて聯立を强行すればカトリック黨の分裂さへも覺悟しなければならない狀況にあつた。加之、社會黨は依然一方の勢力には違ひないにしても其趨勢は下り坂であるから、カトリック黨と社會黨が提携すれば、與黨の一部を反對黨に奪はれてナチスの進出は一層拍車かけられる虞があつた。尤もかかる情勢は過去六年間カトリック黨が民主々義攻撃に精力を傾注した當然の收穫と云ふべきである。

ドルフスはナチスの壓迫を緩和する爲めにも獨裁制度の繼續を有利であると見た。然し墮太利の獨裁はドイツ流のナチズムではなくて、一層緩和された形で實行せられたのである。一國一黨の形に依るものではないが、政黨は凡て解消して政府は國內各種の組合に依つて支持せらるべきものと考へた。猶太人反対ではあるがドイツ國內程に壓迫されず、新聞は檢閲を嚴重にするも、政府自らこれを編輯するには至らない。政府に反対する政治運動は五ヶ年間の禁錮に處せられるけれども、實際には短期で釋放される。一言にして云へば人情味を加へた獨裁であつて、純墮太利流のものと稱しうるのであるが、それ

だけにドルフスのレジームは緩慢な非能率的なものであつた。

ドルフスと其一黨は、最初の程は、ナチスが墮太利の獨裁的政治形態を、好意を以て迎へるであらうと信じた。然るに三月の暴動に於て、ナチスは猶太人に爆弾を投じ、政府の役人を虐め、軍隊、橋梁までも攻撃したので、政府も之に對して强硬な手段を執らざるを得なかつた。そこでナチスに解黨を命じ、その首領を拘禁した。それと同時に他方では、内密に政府とナチスとの間、又ナチス領袖とカトリック黨やハイムウェールの首領との間に引續き交渉が行はれてゐた。

然し舞臺裏の取引は何等の結果をも生まなかつたのみならず、一指を得たナチスは更に腕を得んことを求めた。ドルフス政府の立場は鬪ふ外に途のないことになつたが、其結果はナチスと社會黨とを向ふに廻はすことゝなつて政府側に勝味のないことが明白な戦争であつた。

ナチスは一部分の讓歩に満足しないことが明瞭となるに及んでドルフス政府は「墮太利の獨立」といふ旗を翳したが、これはさして新しい旗印ではなかつた。カトリック黨の領袖は古くから獨墮合邦に反対であつたけれども獨立墮太利の思想は新しい重要性を帶びた。といふことは、世界恐慌の眞唯中に於て、墮太利は其經濟的・政治的孤立に悩むものゝ最大な國であつたから、獨墮合邦の要求は自然の聲といふべきであつた。だから墮太利人の愛國心を搔き立てるには、今が最も不適當な時機であつたのである。

この際ドイツが執つた報復手段はナチスらしい辛辣な方法であつた。それは避暑地として近年、ツーリストの集まるアルプス谿谷へドイツ人の旅行を禁止する命令であつて、チロール地方に取つては致命的の打撃に均しい。

ドルフス政府の擇ぶべき途は二つしか無かつた。一は奥地固有のファシズムを採用して、ドイツ流のナチスに對抗するか、或は全くナチスと異なる形態を執るかであつた。ハイムウェーレンは前者を擇ぶことを主張したけれども、スターレンベルクとフェイとを統領としては、國內の多數を糾合し得ないことも明かであり、ナチスはドイツから必要に應じてタンクでも機關銃でも持込むであらうことが豫想された。そこでカトリック黨の領袖はこの案に贊意を表さなかつたから、閣内の意見は益々不統一を來し、既に勝味の少い鬭が一層不利益に轉廻した。

カトリック黨は其本來の面目に立歸つて、カトリック教擁護の旗を押立て、舊教の牧師を其勢力の中心に守り立てようとした。然しそれは僧侶の肩で支へるには過重な負擔であることが間もなく判明した。西歐の評論家はドイツ・ナチスに對抗する勢力として、舊教々會の力に期待する傾向がある。だが、相ついで起つた奥地の事件は、かかる期待の全然無駄であることを證明してゐる。

社會黨の勢力は夙に奥地の勞働階級を教會の勢力から引離して了つた。勞働者以外の都會生活者も略同様の心構であつたが、ザイペルは教會が全然財閥と同様の意見を抱くかの如き認識を抱いてゐた。

のみならず、政府が社會黨を彈壓し、労働組合に解散を命じた際には、教會も亦この政策を支持したのであるから、労働階級が教會を離れるのは當然の仕儀であつた。

以上の理由の外に、更に重大な點は、地方の農民が教會を見捨て、ナチスに趨つたことである。それがナチス擡頭の最大の原因を爲したものと云へる。何故に墺太利の農民が教會を捨てたかの理由は、恐らくスペインの内亂に際して、農民が突如として教會を焼き、僧侶を殺したのと同じ原因に依るものであらう。墺太利に於てもスペインと同じく、教會は當に或政治制度と密接な關係をもつてゐる。然るに墺太利の農民は、教會が政治と云ふ俗事に立入つて支配することを好まない。僧侶の仕事は贖罪や福音の傳道に在ると考へられてゐるから、彼等は僧侶が政治的指導者になることは行き過ぎだと見るのである。

更に注意すべき點はドルフスの執政以來、ハプスブルク王朝の傳統と舊貴族の復活が著しく眼につき始めたことである。チロール地方は例外とするも、スチリアとフォールアルベルク地方では概して農民は、貴族を排斥してゐたから、教會が貴族の手先となるなどとは以ての外だと考へたのである。

農民達がプロシアの役人が村へ入込むことを好まないのは當然であつたが、左様な光景は眼前に現れて來ない。ナチスとは村の獸醫や教員で代表されて居り、或は近境の村落では、隣のドイツ村の辯護士や醫者を意味するのであつた。此等の人々はドイツの偉大さと、その經濟復興を談り聽かせる。ドイツ

が復興しつゝあるに拘らず、農民達は國境の閉鎖によつて飢えなければならぬ。何故に國境が閉鎖されたかと云へば、牧師達が政權を渴望するからだとナチスは教へるのである。そう云はれて見ると農民達も決心せざるを得なかつた。

もと／＼ナチスの擡頭は墮太利の一九三四年後の状態のみから基礎附けられたのではなくて、教会反対、キリスト教反対の思想を其勢力の根源としてゐる。この國に於けるナチスとカトリック教との農村に於ける鬭争は、教会の牧師と地方のインテリゲンチアの反教会熱との争、農村と小都市との争であつて、情勢は地方に依つて可なり相違してゐた。然しウイーン市ではナチスの勢力は社會黨に壓せられて極めて薄弱であつた。反之、地方殊にスチリア、カリンチア、ザルツブルク及びフォールアルベルクの四州ではナチスが優勢であつたと云へよう。

西歐羅巴では數百年以前に影を潜めた啓蒙運動が墮太利の農村では今頃に結實してゐた。村の青年達はナチス運動によつて明瞭に宗教を離れることになつた。農民の間には昔からの偏狹なカトリック主義が勢力を占めてゐて、僧侶が家畜の疫病を祈禱で全治させる等といふ迷信が行はれてゐた程である。そこで村の若い農民が當然に推理することは、祈禱で疫病が癒るならば獸醫は不用であるし、癒らないとすれば、獸醫の云ふことが正しいといふのである。

舊教から新教に改宗することは、時として一層啓蒙的であり、獨逸的であるとされた。官憲はナチス

の宣傳を處罰するに、それは新教への改宗であるからとも云つた。かかる政策が農民に與へる反動は想像に難くないところである。

大戦前の農村は近代文化から縁の遠いものであつたが、戦後の變遷は眼まぐるしい程に迅速に行はれた。農産物を近所の町に賣つた農民は鐵道に託して遠方へ賣ることになつたし、保守的な風潮をすてゝ、キリスト教社會黨が支持を受ける時代になつた。大戦後に至つて衣服から、ラヂオ器械、蓄音機、自轉車等が都市から輸入され、映畫館が建てられた。產兒制限は舊教から云へば罪惡であつて、風習としては行はれなかつたものであるが、近年はカリンチア州内で私生兒の數が六割も増加した。村のインテリは教會に反対して產兒制限を辯護する傾向になつた。或地方では產兒制限を是認するが爲めにナチス陣營に投する者が續出した所もある。

奥地では外客の誘引が次第に地方產業の一となつたが、僧侶は遊覽客が日曜日に教會へ出席しないといふ理由で之を好まない。然し村の旅館、それが次第にホテルに改善されて、外客相手の商人は反教會の策源地となつた。そして此等が最初にナチス宣傳の役割をつとめた。

かようにしてカトリック黨政府が、社會黨を壓迫する爲めに教會の力を利用しようとした刹那に、宗教的、社會的勢力の中心であつた教會の威信が地に墮ちた。ナチスの擡頭を抑へようとしても亦同様の破目にぶつつかつたのである。獨奥地の後に教會の僧職がヒットライの威風に懼服した事實は、以上

の如き背景を理解することに依つて初めて初めて釋然たるものがある。

かような情勢を前にしてドルフス政府は決然たる覺悟なくして社會黨の彈壓を繼續した。それはムツソリーニの援助を得てナチスに對抗する必要から、又ハイムウェーレンの協力を求める要件であつたからに外ならぬ。然し社會黨自身は實力を以て對抗すべきや否やに就て久しく躊躇した。といふのは決然として起上るには民衆を奮起させるだけの大きなイッショード無くてはならない、それでなければ死闘を行ふに正當な名分が立たないからである。

偶々一九三四年二月十一日に警察官がリンツ市の社會黨本部を占據した。そこで社會黨の幹部は鬪ひを覺悟して、ウイーン本部の決定を促したが、本部は僅かに一票の多數を以て總同盟罷工の決議を行つたけれども、そのスローガンは大衆に行渡らなかつた。共和防衛團はウイーン、リンツ、上部スチリアで蹶起したに拘らず、失業と敗退で意氣阻喪した黨員達は之につゞかず、同盟罷工は失敗に終つた。僅か數百名の武装團が起上つたが、それも大衆から何等の聲援をも受けることが出來なかつた。それでも四日の間、社會黨はウイーンで市街戦を續けて、既に敗北と極つた主義の爲めに鬪つた。

政府は極刑を以て之に對處した。捕へられた武装團は絞殺される外なかつた。中には重傷の爲め擔架から絞首臺に乗せられる者もあつた。七人目の處刑が終つた際、外國の干渉によつて、やつと絞殺を中止することになつたが、然し政府の勝利には違ひなかつた。オットー・バウエルは流刑に處せられ、本

部は閉鎖を命ぜられた。

二月事件以前に、彼等はドイツ社會黨が無抵抗でナチスに降つた光景を見た。そして奮然として起上つたが、奥地利社會黨のあえなき最後と、政府の慘酷な處罰とを眼の前にして、黨員の不満と消極的抵抗は各方面に現れて來た。政府も亦労働階級の好意をつなぐ爲めに努力する必要を認めて、豫て労働運動のシム・パサイザーとして知られたワインター博士をワイン市助役に任命した。夫れにも拘らずハイムウエーレンの主張に依つてあらゆる社會立法を廢止することとなり、遂にはワイン市の市営住宅建築事業まで中止を命じて了つた。

社會黨の労働組合に代つて官製の組合、通常T、U、Cと呼ばれるものが頭をもたげることになつたが、社會黨の地下組織は巧にこれを利用して、四ヶ年の獨裁政治を通じてT、U、C中に勢力を振つた。その結果、この國の労働運動は一面に革命的であり乍ら、反面には妥協的であつて、それが合邦の瞬間に至るまで續行された。

政府は心陰かに社會黨壊滅後にはナチスも好意を寄せるここと期待し、ドルフスはナチスから閣僚を探ることにも異存は無かつたのであるが、飽まで奥地利の獨立を維持することを主張する點に於てナチスと相容れず、ナチスも亦暴力を以て政府顛覆の陰謀を繰返した。

六、ナチのクーデタ

一九三四年七月廿五日にナチスの暴徒がドルフスを暗殺した事件は餘りにも著名である。だがこの事件の背景は恐らく完全に世に発表されないで了るかも知れない。兎に角、此の時の暴徒は首相官邸に程遠からぬ場所に集合して武装することを默認されたのである。折柄官邸に集合してゐた閣僚は、暴徒襲撃の報を受取つて四散し、後にはドルフスとフェイ少佐のみが殘つてゐた。

その刹那の殘忍な光景はこれを省略するとして、官邸を遁れた閣僚は他の場所に集合して軍隊を召集した。軍隊は政府に忠實であつた許りでなく、民衆もナチスに同情をもたなかつた爲めに、暴徒は降伏して處刑せられた。最も上部スチリアとカリントニアに於てはナチスが武装して蜂起したが、政府軍に壓迫せられてユーヨースラヴィアに遁入した。伊太利はナチス國境へ二箇師團を動員して、ウイーン政府を支持する決心を示したから、ドイツは未だ其時機に非ずと見て、靜かに形勢を見送つた。若しこの運動が數時間の間に政權を掌握することに成功したならば、恐らくナチスのクーデタは國際的波紋を起さずに完成したであらう。偶々その失敗の機會に伊太利軍が動員されたことがヒットラーの手を縛ることになつた。

ドルフスの後を襲つて宰相の職に即いた者はシュニュニックであつた。彼の出現は明白にナチスの暴

動を否認することを意味したものであつて、當分獨裁的政治を續行するにしても、極力彈壓手段をさける意向であつた。ドイツも亦四圍の情勢が有利でないのを見て取つて、ナチスの暴力政略を抑壓する訓令を出した。

シュニツクの慰撫政策は稍その效果を示した。都市は依然として不況に悩んだけれども農村の不景氣は多分に改善されて來た。ドイツからの遊覽客は絶えても西歐羅巴からのツーリストは續々と流れ込んだ。それが爲めに農村に於てはナチスの信用が衰へて、次第に政府は威令を取り戻して來た。

労働組合に對する新政府のやり口は、組合に對して稍獨立の地位を與へることであつたが、それが動機となつてハイムウェーレンと政府との關係が悪化した。そこで宰相はフェイ少佐を政府から驅逐し、ついでスターレンベルクを遂ひ、ハイムウェーレンを國防軍の内へ編入したが、スターレンベルクはこれを契機としてオペラ役者と結婚して政界から影を没することになつた。かくしてシュニツクは政界を自由に左右する立場に在つた。彼はチロールの貴族に生れ、熱心なカトリック信徒であつた。その内心は王黨であつたけれども、王政復古が奥地を救ひ得ないのみならず却つて外交的紛糾を招くことを虞れてゐた。一言にして云へば、彼は主義の男であり、教養の深い典型的な舊式の紳士でもあつた。

奥地人の眼から見れば、其最後の支配者が奥地にふさはしい美德を備へ——音樂に長じ、溫雅な、そして誇張を排斥する上品な人柄であつたことは、せめてもの慰安とするに足るであらう。けれども此

危急の際に、最も必要とする性格は高貴な貴族的素質ではなかつた。殊にナチスを向ふに廻して鬪ふことは彼に取つて極めて不幸な運命であつた。

シュニッケンの政府は舊い奥地の様式を維持して、宰相の風格そのものを表現したとも云へよう。もとより奥地は貴族政治の時代に榮華の頂點に達したのであつたから、その傳統も亦貴族的であつた。然し貴族社會の衰頽と共に官僚政府が之に代つた爲めに、一切の民衆運動を好まず、國民大衆が公共生活に參加することを排撃した。従つて工業勃興の時代に入つても、その弊害を受けないで終つた代りに其利益を享有しなかつた。

奥地が將に亡びんとして數ヶ年間再び官僚政治が威勢を揮ひ、民主主義は破壊されて了つた。フアシズムが擡頭したけれども、ナチスもハイムウェルも打ちのめされて了つた。カトリック教會は影を薄くし、憲法は殘骸を止めるのみで、内容は空虚であつた。そして國家を支配した警察と官廳とは、微温的な、活氣に乏しい、然し乍ら品位のある專制政治を續けた。

その隣にはナチスのスチーム・ローラーが現存の凡ての信仰と社會制度とを押し潰して横行してゐる傍で、奥地は疲勞し果てゝ、世界の一切の恐怖の外に靜かに横はることを希求してゐる如く見えた。

シュニッケンの政治は如何にもメランコリヤにとつ附かれたかのように、然し又古く光輝ある文明の夕陽の如くにあでやかであつた。

七、國際情勢の急迫

一九三六年の夏頃まで墺太利の國內には、勢力の均衡を破る何事も起らないかに思はれたが、この均衡は結局外部から破壊されて了つた。それはエチオピア問題に依つて惹起された獨伊關係の變轉であつた。孤立の哀愁に悩む伊太利は、ドイツの好意を求める爲めに、墺太利をドイツの自由な處分に任せた決心をつけた。その結果ムッソリーニはドイツと圓満な妥結に達するよう墺太利に勧告することにした。そして出來上つたものが一九三六年七月十一日の獨墺條約である。

この條約によつて墺太利は外交政策についてはドイツと歩調を合せることを約束したのであるから、一旦戦争となればドイツ側に加はるものと一般に推測された。尤も墺國內でナチス黨は禁制されてゐるけれども、事實上國民黨として結社を認められて、その黨派の一人ホルステナウ大佐が内相に任せられた。夫れにも拘らずナチスの黨勢振はず、警察の監視が嚴重に行はれてゐたし、外交方面に於てはチエコスロバキアとの國交は舊に依つて變らず、ドイツの計畫は思ふやうに進行しなかつた。ドイツ側に於てはエチオピア遠征が伊太利の行動を掣肘してゐる間は、墺太利の事態に急變を與へない方針を執つたが、スペインの内亂が進捗すると共に獨墺合邦の計畫は次第に具體化せられるやうになつた。

一九三八年一月にドイツ・ナチスと關係の深いタウス博士が逮捕され、柏林との往復書類がウイーン

官憲の手に入つた。その内にはヒットラーの股肱の鬪士ルドルフ・ヘッスからタウス博士に宛てた指令もあつたが、それは四月上旬にウィーンに擾亂を起すこと、そして政府が强硬な手段を執る場合にはドイツ軍に直ちに奥地に進入すべき旨を約束した文書であつた。

この計畫に對して、ドイツ國防軍の司令官フォン・フリツは反対意見をヒットラーに具申したと傳へられるが、その結果であつたか同司令官は間もなく部下十三名と共に馘首せられた。かやうな行懸りから、ヒットラーは豫定を繰上げて、速かに奥地の併合を斷行する決心を堅めた。一九三八年二月二日、宰相シュニツクはヒットラーの山莊ベルヒテスガーデンに呼寄せられた。宰相はタウス博士に關する押收書類を持参してゐたが、彼は之を提示する以前にヒットラーの叱咤を受けた。この會談に於てドイツ側は數ヶ條の要求を突附けたが、その一は奥地のナチス首領であるセイス・インカートを内務大臣に任命する件であつた。

シュニツクはこの訪問に際して賓客としての待遇よりも屬僚らしい取扱を受けたと傳へられる。奥地の閣員の任命は大統領の權限であつて宰相の手では如何とも爲し得ない旨を答へたが、總統の申出は篤と大統領に傳達すると應答して前後十一時間に亘る會談を終つた。

奥地の大統領ミクラスは、ヒットラーと協力する熱意を欠いた男であつたから、セイス・インカートを内相に任命することを肯んじなかつた。實際またインカートは豫てドイツと連絡をとつた七人組の

一人でもあつた。そこで妥協の意味を以てインカートを司法大臣の椅子に据へ、兼て警察事務を執掌させることにした。

この決定に對して伯林政府は二月十五日に最後通牒を以て、總統の要求通りに實行しなければ、ドイツ軍は直ちに國境を越えて墺國に進入する旨を明白にした。ヴィーン政府はこの日、終日ムツソリーニと電話の連絡を取らうと努めたが、とうとう出來なかつたので、ミクラスはドイツの要求を容れる外に途のないことを覺悟して、インカートを内相に据える外、ナチス系の三名をも閣僚として任命した。

ドイツと墺太利との交渉は西歐羅巴の各國に憂色を與へたが、伊太利はこの協定に依つて、獨伊樞軸の基礎が益々堅固となるべき期待をかけ、英佛は表向には今後のドイツとの了解に一の障害が取り除かれたものとして、墺太利の獨立維持にはかない望を繋いで居た。

墺太利の新内閣は國民に對して國內平和の新しき時代が到來したと聲明したけれども、その新しき措置の第一は三千名に餘るナチスの政治犯人を一時に釋放することであつた。かくして墺太利は單獨にその途を歩まなければならなかつた。伊太利は最早や三年前の伊太利ではなくなつたし、英佛の支持も望み難い状況であつた。

チエンバレン内閣はフランスを助けて一臂の力を墺太利に籍す積りであつたらうか。フランスは人民

戦線内閣の混亂の後を享けて國內の收拾に忙殺されてゐるさ中であるから、墺太利の問題に耳を傾ける隙はなかつた。英國はエチオピア事件に伴ふ經濟制裁の失敗、スペイン内亂の紛糾、極東問題の難關等に鑑みて、政策を一轉すべきや否やの重大岐路に立つてゐた。

チエンバレンは集團的安全保證が役に立たない事を悟つて、寧ろ個別的に各國との利害を調整する方向に進まうとしてゐた。一九三七年十一月にハリファツクス卿をドイツに遣はした際にも、ダニュー、ヴ流域の問題に就てはドイツの自由な行動を認める如き意嚮を洩したとさへ傳へられた。保守黨政治家の考へた慰撫政策（アビーズメント・ポリシー）も一九三七年の八月に伊太利と談合し、十一月にドイツと接觸した結果は、一として成功を示さなかつた。而もこの慰撫政策は、英國外務省の頭を飛越えて首相チエンバレンが自ら采配を振つたものであるから、外相イーデンの主張と懸隔のあることは掩へなかつた。イーデン一派の少壯閣僚は、獨伊兩國に對して酒代を提供することが却つて英國の弱體化と見られて、一層その冒險政策を獎勵する結果に終ると觀測したのである。

二月中旬、墺太利の形勢甚だ不穩な相貌を呈した際、フランス政府から英國に對する申出は、英佛共同してドイツに對し、兩國は墺太利の領土保全を擁護すべしとの通牒を出さうといふ提案であつた。イーデンは直ちに之に同意したけれども、總理は獨伊を慰撫する政策に逆行する頗る危險な遺口だと同意せず、外相と同席の上で伊太利大使グランヂを招いて、墺太利問題に對する伊太利の立場を質問した。

其時グランヂの答へたことは、ローマ政府はドイツ系の二ヶ國が緊密な協力を約束することは實際政策として至當であるのみならず、中歐の平和と安寧の爲めに緊要事であると考へる旨を答へ、更に墺太利問題の最終的決定は英獨佛伊四ヶ國の協定に俟つことを最善の方法と思ふとも附加へた。伊太利大使は此場合にも、フランスはソ聯邦を加へなければ同意しないであらうし、ドイツは又ソ聯邦の參加に同意しないから、結局かような案は成立の見込のないことを承知してゐたに違ひない。

その翌日、即ち二月十九日、英國政府は數時間に亘る閣議を開いて墺太利問題を討議したが、チエンバレン案とイーデン案のいづれを擇ぶべきかに就ては決定に達しなかつた。

これと相前後してヒットラーはライヒスターへに於て三時間に餘る演説を試みた。その中には英國、佛國に對するドイツの政策を敷衍し、墺太利とチエコスロヴァキアに對しても、民族自決主義の見地から問題の解決を行ふべきであると云つた。ドイツの意図は最早や寸毫も疑ふ餘地はない。それにチエンバレンの機關紙タイムスが二月十七日、二月二十一日の兩日に亘つて、英國はドイツの東南進出を阻止すべき限りでないと明瞭に之を是認したことは頗る注目を惹いた。

ヒットラーの演説が終つて數時間の後、英國外相イーデンは辭職の意を表明したが、彼は何故に特にこの際に辭表を提出したか、何故に辭職が直ちに受納されたか、それは他日を俟つて明白にされる事實であらう。イーデンの席は直ちにハリファックス卿に振り當てられ、チエンバレンはその初志の通り慰

撫政策に依つて「時に應じた平和」、實は軍備充實の時間を得る爲めに平和の冠で頗冠りする外に途なしとあきらめたのである。

八、 奥太利の臨終

ベルヒテスガーデンの山莊に於てヒットラーは二月十二日、奥太利宰相に對し、國の獨立を保證し、その國內のナチスを抑制すべき約束を與へたけれども、實際の情勢は奥國のナチス活躍が顯著に眼立つて來た。

シュニツクは尙ほ其主張を枉げず、二月廿四日の議會に於て、ヒットラーの與へた保證を引用し、『過般の協定は正直な平和であつて、奥太利は奥太利人として殘る』と述べた。彼の見る處に依れば、奥太利人の大多數は、ドイツとの合併よりも、獨立を希望するものであるから、その證據として、問題を人民投票に依つて決定しようと考へた。そこで、三月九日に人民投票の決定を公布して、来る十三日に之を舉行する旨を明かにした。處が獨奧兩國のナチスは一齊にこの決定に反対し、『不公平な策動』に關與すべからずとの指令を出した。ウイーン市を始めとして、國內到るところにナチスの反対運動が舉行されたが、インカートの率ゐる警察官は拱手して傍観してゐた。

三月十一日、ウイーンの町は二日の後に人民投票——奥太利が獨立國として殘るか、ナチス・ドイツ

に合併するかの重大な運命を決定する日を控えて、案外に靜かな朝景色であつた。空には陰氣な雲が垂れて、薄ら寒い風が吹き、やがて冷たい雨がこぼれて落ちさうな天氣であつた。その中を祖國戰線の黨員が、時々、自動車の上から、『シュシュニックと共に祖國を衛れ』と印刷したビラ札を撒いて通つた。街角の廣告柱にはシュシュニックの肖像を刷り込んだ宣傳文が人眼を惹き、往々交ふ市民の口から口へと氣味悪い流言が傳はつて行つた。

この日の朝、シュシュニックはその閣僚たるインカートとホルステナウの兩大臣から人民投票の延期を求める最後通牒を受取つた。その中には、若し延期の命令が午後四時半までに發せられない場合には、國境に待機するドイツ軍は午後五時を以て奥太利に進入すべしと記載されてゐた。宰相はこの要求を容れる外に獨立を救ふ方法のないことを知つてゐた。

午後になつてドイツ國境の中央にあるザルツブルクからの電報が、形勢の不穩なことを報じて來た。

この町の一角、ナチスの勢力區域からナチ派の示威運動が行列を始めて祖國戰線派と衝突したといふのである。リンツ市やインスブルック市からも、ナチスの活潑な運動が報道された。その間にウィーンの街では黒雲が吹き霽されて、早春の日の光がさし始めたが、國境方面からの急を報ずる電報によつて、市民の不安は狂躁の氣持に變つて行つた。腕に凸の印をつけたナチス黨員があちこちと姿を現はしてゐるではないか。政府は内閣々議を開いて大統領出席の上、対策を論議してゐるが、的確な手段をとるま

でには閣議が一致してゐなかつた。

然るに午後四時にウイーンに着陸した飛行機は更に第二の最後通牒をドイツから齎した。それは(一)同日午後七時三十分迄にシュニュニックが辭職しなければドイツ兵は直ちに奥地に進入する、(二)後任宰相はインカートを任命すべし、(三)閣員の三分の二はナチス黨又は其同情者たるべく、又奥地ナチス黨の活動を認許すべし、(四)奥地人部隊（ドイツに遁入せる約三萬のナチス青年隊）の歸國を許可すべしと云ふことであつた。

兎角するうちに宰相シュニュニックは、電話のベルのけたゝましい音を聞いた。呼出しへベルリンであつた。總統ヒットラーが、その官邸から直接に電話をかけたのである。

『明日の人民投票は止めるのがよからう。君は當然辭職すべきである。それが實行されない場合には、ドイツ軍は奥地に侵入するであらう。一時間以内に返事を待つ』とアドルフ・ヒットラーの肉聲である。

シュニュニックは閣員の集つてゐる會議室に行つてドイツの要求を披露した上、辭職を申し出したが、大統領は言下にこれを拒絶した。餘すところは四十分しかない。

宰相は再び部屋を離れて、電話機を取り上げた。ロンドンを呼出して、英國外務省の斡旋を依頼したのである。それから暫く受話機を置いて返事を待つたが、間もなくロンドンからの返事は英國が口をき

く意嚮は無いといふ旨を答へた。シユシユニックはムツソリーニに訴へようと試みたが、相手は不在であつた。伊太利政府は斡旋の勞は取れないと云つた。そこで宰相は最後の頼とするフランス政府を呼出したが、パリの意中は英・伊と同様で、介入を試みる氣持はないと云ふ返事であつた。

餘す時間は僅かに十分しかない。

シユシユニックはマイクロフォンの前に立つた。時は午後七時五十分であつた。

『懊太利人、同胞よ。ヒットラー總統は、今、予に迫つて人民投票の放棄と、余の辭職とを慾漬して來た。若し一時間以内に予が承諾しなければ、ドイツ軍は懊太利に侵入するであらう、流血と破壊とを免がれむが爲めに、予は辭職を承諾した。神よ、懊太利を救ひ給へ！』

飛行機が數臺、首相官邸——そこで前任者のドルフスが懊太利ナチスの爲めに打ち殺された記憶の新しい——の上空を飛んでゐた。兩翼に卍を赤く染めた爆撃機がパンフレットを撒いてゐるのである。その表紙には『ナチ・ドイツはナチ・懊太利を歓迎す』と誌してあつた。

シユシユニックは、短かい告別の辭を終つて、部屋から出ようとした刹那に、ナチスの一隊に包囲せられて、其儘拘留の身となつた。(彼は今も尙ほベルヴェデール宮殿の内に幽閉の月日を送つてゐるのである)。

シユシユニックの告別の辭が終らない間にウィーンの廣場はナチスの一隊に依つて占據され、部隊は

隊伍を整へて一觸即發の姿勢にあつた。宰相の放送を聞いた此等の隊員は歓呼を擧げて祖國戰線本部へ押しませて行つた。

シュニックに代つて、内相ツアイス・インカートの演説が響き渡つた。インカートは夙にナチスの有力な一員であつた。『或は起りうべきドイツ軍の侵入』に對して國民の慎重な態度を要望する旨を三度くり返して述べた。

市廳舎と宰相官邸の前には、數萬の群集がひしめいてゐる。赤・白・赤の奧太利國旗の上へインキで書いた卍の速成旗が到るところに見え始めた。その混雜の中を『鬪争による勝利』と大書した長い旌幟が、電光のように縫つて行つた。群集を指揮する人々の中には、世界大戰當時の雄將アルフレッド・クラウスや、ドイツ・クラブ會長バルドルフ將軍等の顔が見えた。

午後十一時十四分、ミクラス大統領は、ドイツ國境の三方面からドイツ軍侵入の報に鑑み、インカートに後繼内閣の組織を命じた旨をラヂオを通じて發表した。午後十一時半、ウィーンの中央放送局は、ドイツ國歌を繰返し鳴り渡らせてゐた。その夜の内に、宰相官邸も、市役所も、アム・ホーフ廣場の祖國戰線本部も、皆屋上に卍の旗を翻したのである。

其中でも警視廳は、午後十時半に、廳内に掲げてあつたシュニックとドルフスの並んでゐる肖像を取り壊して、正門に卍の旗を掲揚した。間もなく――精確に云へば、午後十一時四十五分に――ウイ

一ノ市役所へ、五十餘名のナチス保安隊が乗込で来て、居合はせた祖國戰線の自警團員を追出して了つた。それからドイツ國歌とナチス黨歌が交互に唱和され、最後に大巾の黨旗が屋根の上に掲揚されて、群集は熱狂の聲をあげた。

その夜、明けるに間のある午前一時半、奧太利ナチスの領袖フーゴー・ユリイ博士が、宰相官邸の露臺に姿を現して、廣場に集まつた群集に向つて、新内閣の顔觸、インカート首相を始め十一名の閣員の氏名を發表した。そして午前二時には、シュシュニツク政府唯一の公黨たる祖國戰線に對して解散令が發せられ、豫て用意したブラック・リストによつて、反ナチス派と目せられた政治家、官吏、財閥の眼星しい人々は續々と逮捕されて行つた。かくして三月十二日の朝はウィーン市民の熱鬧の裡に明け渡つたのである。

× × × ×

最近の奥太利が世界に押し上げた政治家の中に、渺くとも歴史に殘る名が三つある。それは第一にイグナツ・ザイペルであり、第二にエンゲルベルト・ドルフズであり、そして第三には、最後の悲劇の主人公シュシュニツクである。

シュシュニツクは前にも述べた如くカトリック信者らしい几帳面さと、冷靜であり乍ら纖細な神經の

持主である。青年時代には軍人であり、後に法律家になつた。然し其生活の官僚的であつた割合に詩的情緒に豊かな半面は、彼が不斷にゲーテの詩に心酔し、ホフマンスターの詩を愛したことによつても推測される。彼は又ザイペルの弟子であり、ドルフスの弟分でもあつた。だから奥地はドイツ・ナチスの國家觀念とは離れて、ドイツとスラーヴと、ラテンと三つの文化を融合すべき特殊の使命をもつと信じてゐた。ウイーンの都には傳説として、思想として、文化として特異の文明を繼承すべき高貴な任務があるとも考へてゐた。

古い奥地帝國は廣袤廿四萬方哩の地を占めて、六千萬に近い住民を抱擁してゐた。面積に於ては歐洲第二位、人口に於ては第三位を占めて、十二の民族が雜居して居た。この寄木細工の如き團體はサン・テチエンヌ王朝の末孫を皇帝として仰ぎ、フランツ・ヨゼフ王は舊王朝の代表者として、最後の騎士として、帝國の運命を一身に託されてゐたのである。

第十九世紀に入つてから、近代の國家主義の擡頭が奥地に新しい任務を負はせた。多くの民族が住居する一地域に、此帝國は、その多年の經驗と手練とによつて、帝國の思想を近代的に更生させる橋渡しの仕事を託された。にも拘らず、奥地は舊帝國から新帝國への道を發見し得ずして倒れた。それが必然的に獨奥地併合の門戸を開いたのである。

それにしても、一九三八年の三月事件は、當分その經緯を明瞭にすることが困難であるだらう。然し、

事件はまだ最後のペーデを綴つては居ない。ナチス・ドイツがダニユーヴ河の要衝を擱んだ結果として、次々に起るべき新發展は、歐洲の近代史に一つの革命的事實として、後世更に詳細な検討を受ける時が来るであらう。

誠に奥地は、歐洲要路の交叉點であり、東西文化の合流點として中世以來、重きを爲して來た。この地方が、一つの國家を形成しないにも拘らず、一つの王朝をもち、一つの文化に率ゐられ、そしてカトリック教の世界主義を基調として、一つの合成的な勢力を爲してゐたのは、實に奥地の地理的條件と、その歴史的理由が然らしめたものであつた。

三月十六日、ベルリンの郊外テンペルホーフの飛行場はミュンヘンから飛んで來る凱旋將軍ヒットラー總統を迎へる爲めに、朝から人の波で埋つてゐた。ゲッベルス宣傳大臣の布告は、唯さへ湧立つ人氣を、いやが上に煽り立てゝ、全ベルリンは群集と、國旗と、歡聲で割れ返る騒ぎであつた。

ゲッベルスは全國民に告げて云ふ、

今日午後五時、我等の總統はベルリンに歸る。歴史的大事件は成就した。奥地は我等の懷に甦つた。幾百萬のドイツ人が血を流して鬪ひ、苦惱した偉大なる夢、ドイツ人の大帝國が建設された。伯林人よ！

今、總統は歸つて來る。我等はライヒの首府が未だ曾て見なかつた歡迎の宴を張らう。百萬の手は彼

の身體に捲きつき、百萬の歡聲は彼に感謝を捧げよう。

ヒットラーの専用機D 2 6 0 0 號は午後五時五分に着陸した。外相リッベントロップ、總統辨務大臣ヘッスはヒットラーについて飛行機から姿を現はした。

總統は、通路に作られた二百五十萬の人垣をわけて、ウイルヘルム廣場に歸つた。熱狂した市民は夜の十時過まで總統廳の前に押寄せて、歡呼の聲をやめなかつた。かくしてドイツ人の蕩醉が續き、墮太利の滅亡の歴史が幕を下したのである。